

柳宗元柳州詩

——葛藤の鎮靜とその由來——

下定雅弘

一

柳宗元(七七三—八一九)についての研究は数多いが、今、文學研究の分野に限って言えば、彼は山水詩人として高い評價を受けてきたから、いわゆる永州八記や山水詩を論じたものが多い。ところで、永州八記は無論彼の始めの流謫地である永州(今の湖南省零陵縣)で書かれたものだが、山水詩もまた殆ど全てが永州でうたわれたものである。傳記や寓言文學の研究も少なくないが、これまた後の流謫地柳州(今の廣西壯族自治區柳州市)で書かれたと斷定できる作は全く無い。

従つて、これまでの研究は、散文を論ずるにせよ詩を論ずるにせよ、主に永州時代の作に目を向けて、柳州での作品、即ち彼の最晩年の作品については、注意を拂うことが少なかつた。

そこで本稿では、彼の柳州時代の詩(以下柳州詩と略稱。同様に永州時代の詩も永州詩と呼ぶ)に焦點をあて、永州詩と比較した場合の特徴について卑見を述べてみたい。

既に私は、二篇の論文を發表して、永州詩では流謫の苦惱がどのよう表現されているのか、考えを進めてきた。

柳州詩もまた、以下に舉例する詩が示すように、流謫の悲歌・望郷

の哀歌としての性格を引き繼ぐのだが、その苦惱の表現は永州詩と比べてどのような變容を見せるのだろうか。それが本稿の課題である。

二

柳州詩の敘述に入る前に、永州詩の特徴を整理しておこう。まず次の詩を讀まれたい。おそらく元和二年(八〇七)の冬以前、永州に流されて二年を経ない時期の作である。

橘柚懷貞質	橘柚	貞質を懷く
受命此炎方	命を受く此の炎方	
密林耀朱綠	密林	朱綠を耀かし
晚歲有餘芳	晚歲	餘芳有り
殊風限清漢	殊風	清漢に限られ
飛雪滯故鄉	飛雪	故郷に滯る
攀條何所歎	條を攀じ	何の歎く所ぞ
北望熊與湘	北のかた熊と湘と	を望む

(四三『南中榮橘柚』)

詩題は謝朓「酬王晉安」(文選卷二六)の一句をそのまま借りる。四句まで橋柚のことをうたうが、その着想は橋を擬人化して徳を頌える九章橋頌に得ている。「橋柚」は無論柳宗元自身を、「密林」は永州を喻えている。「清漢」は普通天の河だが、ここはそれでは通らず、おそらく漢水を指す。五・六句は、異なった風俗は漢水を境目にし、冬の今長安には飛び交う雪もこの炎熱の地には至らない、の意である。「熊」・「湘」は共に山の名。

彼は誠實さと豊かな才能を持ちながら、異俗に朽ちていく自らを歎く。そして、山河に隔てられた長安をみつめて望郷の情を激しくしている。

この詩において、彼は自らを高く評價し、従って自分は長安に在って當然との思いを抱いている。この自己認識と望郷の情とが、永州に在る現實とまっこうからぶつかって生まれているのがこの詩である。

この詩に見える望郷の情と流謫の現實との對立を、以下敘述の便の爲に第一の葛藤と呼ぶ。

この詩は、第一の葛藤を鮮明に示す、永州詩中の典型的な例である。だが、彼の境遇を考えれば當然と思われるこの第一の葛藤が、必ずしも永州詩の主流を占めるわけではない。むしろこのように率直に流謫の苦惱・望郷の情を表現する作は僅かであり、もしただ苦惱のみを吐露する作を求めれば、ほぼ一〇〇首の永州詩中、『入黃溪聞猿』(四三)、『中夜起望西園值月上』(四三)の二首が有るに過ぎない。『南中榮橋柚』にしても、結びの二句は單純に長安を望んでいるのではない。この二句には、故郷を望んでも見えないわけもないのに何を愚かな、という望郷の情の空しさの自覺が有り、これは第一の葛藤から外れるものである。

永州詩の世界には、第一の葛藤に根は持ちつつも、そこから逃れようとするまた別の葛藤が有る。『南中榮橋柚』ではその端緒しか見せなかつたもの、次の詩はそれを主題とする。

少時陳力希公侯 少時 力を陳べて公侯を希う
許國不復爲身謀 國に許して復た身の爲に謀らざりき
風波一跌逝萬里 風波に一たび跌きて萬里に逝く
壯心瓦解空縲囚 壯心瓦解して空しく縲囚せらる
縲囚終老無餘事 縲囚老を終えて餘事無し
願下湘西再溪地 願う湘西再溪の地に卜せんことを
却學壽張樊敬侯 却つて壽張樊敬侯を學びて
種漆南園待成器 漆を南園に種えて成器を待たん

(四三『再溪』)

元和五年(八一〇)の作である。「再溪」は柳宗元が「愚溪」と名づける前の名。「壽張樊敬侯」とは後漢樊重への諡。彼が器物を作ろうとして、先ず梓と漆とを種えた所、人々はこれを嘲った。だが、歲月を積んで生長した木々は立派に器物を作るのに役立ち、かつて笑った人々も皆これを借り求めにきたと言ふ(後漢書卷三三)。

彼は失意の中で、永州の人間として落ち着こうと自らに言い聞かせている。これは、先の詩が望郷の情を激しくしていたのとは正反對である。

だが注意すべきは、この詩において、永州に安住しようとの思いは何らかの積極的な動機に裏付けられているのではないことである。彼は命を捧げて國の爲に盡くし何の私心も抱いていなかったものであり、

失脚したのは風波に一たびつまぎいたから、即ち自分の罪によるのではなく外部から襲いかかる何物かを乗り切ることができなかったからである。つまり、流されて永州に在ることを到底納得できないものであるとの思いを彼は持っているものであり、それは先の詩に見える自己への高い評價・長安に在って當然との認識と一致するものである。

だが、この詩では望郷の情の表現には向かわない。罪人となつて晩年を過ごすだけという現實を前にして、「壯心」を抱き續けることの徒勞を自覺するゆえに、彼はここでは永州に落ち着く道を選ぼうとしているのである。言い換えれば、この詩は、流謫の現實に對し望郷の情を抱くという第一の葛藤の持つ空しさ・徒勞から逃れようとする所に生まれている。この第一の葛藤から逃れて安寧を得ようとする心の動きを、以下、敘述の便の爲第二の葛藤と呼ぶ。

以上、二首を擧例することにより、私は永州詩に見える心の力學の骨格を示した。『南中榮橘柚』は、第一の葛藤を主題としつつも、第二の葛藤への端緒を結びの二句に持つ。『冉溪』は第二の葛藤を主題としてはいるものの、この葛藤は氣持ちの持ちようが少し變れば直ちに第一の葛藤に移行する。第二の葛藤は、第一の葛藤は未解決のままに、そこから逃れようとして生まれているものであるから、眞の安寧に至ることのできない必然性を持っているのである。

永州詩とは、一首をとつても、永州郷全體をとつてみても、この二つの葛藤の間を搖れ動く世界である。そして、第二の葛藤の内容は多様であつて、これが永州詩の世界を更に複雑にする。

第二の葛藤の主要なものとしては、

① 山水の美に没入することにより流謫の苦惱から逃れようとする表現

② 官界に然るべき地位を得て國政に貢獻することを願う儒家的立場ではなく、莊子・佛敎の立場に身を置いて、流謫の苦惱・失脚の煩悶から逃れようとする表現

③ 長安を俗塵の巷とみなし、故郷ではなくしてしまふことによつて、望郷の苦しさから逃れようとする表現⁽⁹⁾が擧げられる。こうした心の動きがかなり成功して表現されている詩を擧げておこう。

新沐換輕幘 新たに沐して輕幘を換う

曉池風露清 曉池 風露清し

自諧塵外意 自ら塵外の意に諧えり

沉與幽人行 沉や幽人と行くをや

霞散衆山迴 霞散じて衆山迴かなり

天高數雁鳴 天高くして數雁鳴く

機心付當路 機心 當路に付す

聊適羲皇情 聊か羲皇の情に適う

(四三『且攜謝山人至愚池』)

これも元和五年愚溪を得て後の作。「愚池」は愚溪の一角である。「幘」は冠の下につける頭巾。「幽人」は隱士。「機心」は莊子天道篇に出る語で、世俗のたくらみの心。

柳宗元は、あけがたの自然と一つになつて爽かさをうたう。そして、「機心」は政界の要路にこそ伴うもので自分とは無縁、淵明先生が自分を羲皇上人(伏羲)のようだと思つた(『與子儼等疏』)のと同じく、何の悩みのないのどかな心境なのだと言ふ。また、「自諧塵外

意、「機心付當路」の二句を見れば、明言されているわけではないが、都長安は俗塵の巷であり、きたないかけひきに明け暮れる官僚の町との見方を認めることができる。

つまりこの詩では、第二の葛藤の三つの主成分が互に補充しあいつつ一つになって、安定した情調を作り出しているのである。こうした詩を更に進めた所に、『漁翁』(四三)や『江雪』(四三)は位置付けられるであろう。

このように、流謫の苦惱から逃れて安寧を得たかに思える一群の詩が、永州詩中には存在する。だが、永州詩の大半はここに至ろうとして至りきれず、至りついてもまた苦惱に舞い戻る揺れ動く世界なのである。その必然性は既に述べた。具體的に觸れておこう。

彼の山水詩には一定の型がある。例えば、「高きに升りて自ら舒うせんと欲すれば、彌々遠念をして來たらしむ」(四三『湘口館瀟湘二水所會』)と言う二句は、第二の葛藤から第一の葛藤へとという展開を示しているのだが、これはこの詩全體の凝縮であり、同時に山水詩の大部分の展開の型をも示している。

あるいはまた、「潛軀軀鎖を委し、高步塵埃を謝す」(四三『法華寺石門精室三十韻』)、世のきずなを棄て俗塵に別れを告げよう、と莊子の徒となつたかのように高言する人間が、直ちに「羈木(流木) 漂浮を畏れ、離旌(旗竿を離れた旗) 搖蕩に倦む」(同上)と、流謫の苦惱を表す。

更にまた、「久しく簪組の累いを爲す、此の南夷に謫されしを幸いとす」(四三『溪居』)と、都での役人暮らしを見限り永州に流されて幸せだと言う人間が、全く反對に「北を望めば親愛を問つ、南を瞻れば夷蠻に雜わる」(四三『構法華寺西亭』)と、望郷の情を激しくし、蠻夷

の地に在ることを歎いている。

無論、こうして揺れ動く心に對する嫌惡と疲勞の感情も、永州詩には認めることができる。それもまた葛藤には相違ないが、新たに一類を立てるような展開は示さない。

以上を一言でまとめれば、永州詩とは、流謫の苦惱からの脱却を求めてざわめき揺れ動く世界なのである。

三

前章では、永州詩の特徴を概観することにより、同時に柳州詩を見る視點をも提示した。柳州詩もまた流謫の境遇を土壤とする文學であり、永州詩の流謫の悲歌・望郷の哀歌としての性質を引き継いでいる。その悲哀は柳州詩ではどううたわれているのか。永州詩に見た二つの葛藤はどうなっているのか。

三の1

まず、ざわめく永州詩の世界に近似する作を見よう。

城上高樓接大荒	城上の高樓大荒に接す
海天愁思正茫茫	海天の愁思正に茫茫
驚風亂颭芙蓉水	驚風亂れて颭す芙蓉の水
密雨斜侵薛荔牆	密雨斜めに侵す薛荔の牆
嶺樹重遮千里目	嶺樹重なつて遮る千里の目
江流曲似九回腸	江流曲りて九回の腸に似たり
共來百越文身地	共に百越文身の地に來て
猶自音書滯一鄉	猶自ら音書一郷に滯る

(四二『登柳州城樓寄漳汀封連四州』)

詩題の「漳汀封連四州」とは、漳州の韓泰、汀州の韓暉、封州の陳諫、連州の劉禹錫を指す。彼らは皆、柳宗元と同じく元和一〇年（八一五）召されて都に至ったものの直ちにまた刺史として出された。「大荒」は山海經に出る語で、極遠の地を意味する。「薛荔」はまささのかずら。「九回腸」は、司馬遷『報任少卿書』に、憂いによって「腸は一日に九たび廻る」と言うのに基づく。結び二句は、共に邊境にやつてきていながら、いまなお互の音信が通じないことを言う。

六句までの情景描寫は、ざわめき荒れ狂う柳宗元の心境を投影している。そのざわめきは、長安から無限に隔てられた絶境異域に在る現實と、それに耐え難い望郷の情とが、まっこうからぶつかるところに生まれている。この詩は永州詩に見た第一の葛藤を示している。次の絶句もまた同じ特徴を示す。柳州時代のいつ頃の作かはわからない。

海畔尖山似劍鋌 海畔の尖山劍鋌に似たり

秋來處處割愁腸 秋來 處處 愁腸を割く

若爲化得身千億 若し身千億と化し得ることを爲さば

散上峯頭望故鄉 散じて峯頭に上りて故郷を望まん

（四二）『與浩初上人同看山寄京華親故』

多寶佛（寶勝如來）が、布教の爲に身を無量千萬億の菩薩に分かつことは、法華經見寶塔品に見える。遙かに長安より隔てられてどうすることもできない現實を知りつつ、それに耐えることのできない望郷の情が、この傷ましい比喻を生んだ。この詩もまた永州詩に見た第一の葛藤を示している。ただし、二首の葛藤は、嚴密には永州詩のそれ

と同じではない。そのことは次節の最後に述べる。

次の詩も第一の葛藤を示してはいる。しかし、それだけではない。

宦情羈思共悽悽 宦情羈思 共に悽悽

春半如秋意轉迷 春半ばにして秋の如く意轉た迷う

山城過雨百花盡 山城に雨過ぎて百花盡く

榕葉滿庭鶯亂啼 榕葉庭に満ちて鶯亂れ啼く

（四二）『柳州二月榕葉落盡偶題』

一・二句では、彼の心は役人としての情・邊境に在る思いにとりつかれて千々に亂れている。だが、三句のたたきつける雨と散り盡くす花を経て、ざわめいていた心はある方向へ結晶していくようである。榕は、「其の木大にして陰多く、百牛を蔽う可し」（百家注本補注引藝苑

雌黃）と言うほどの巨木である。この葉が全て落ち盡くし庭に滿ちるさまはただごとではない。散り盡くす百花、落ち盡くす榕葉、この壯絶とも言える情景に、彼は自己の零落を見たのであろう。それは一・二句の迷いの渦の中にある心境とは異なるものである。迷いは春の雨に洗われ、ある清冽な感情を持って彼は自らの零落をみつめている。

「鶯亂啼」は望郷に亂れる思いを暗示する表現である。鶯の鳴き聲に望郷の情をかきたてられるのは、永州詩『聞黃鸝』に見えている（後述）。しかし、ここには『聞黃鸝』のような亂れる思いを抑える表現は無い。望郷に亂れる思いは落ち盡くした榕葉と同じくみつまられていく。だから、結句は一・二句のようなざわめく心の表現ではなく、自らの境遇がここに極まったと見切っている句であらう。

つまりこの詩の表現は、葛藤そのものから葛藤を突き抜けた心境へ

と移行しており、先の二首が第一の葛藤のみを激しくしているのとは異なる。そして實は、この詩は永州詩の世界から柳州詩の世界への縮圖であり、柳州詩の世界を開く扉でもある。

結論の一端を述べた今、敘述の便を考えて、ここで柳州詩の現象的側面についての見取圖を提示しておこう。

柳州詩の殆どは、右三首のような激しさを示さない。以下に舉例する詩によって自ら明らかかなように、柳州詩の葛藤は著しく弱くなっている。そして、苦惱から逃れようとする第二の葛藤は完全に消えてしまふ。更には、第一の葛藤さえも消失するのが柳州詩の世界なのである。

三〇二

この節では長安に對する意識を検討しよう。まず次の詩を讀まれたい。

林邑山聯瘴海秋 林邑の山は瘴海の秋に聯なり

牂牁水向郡前流 牂牁の水は郡前に向かいて流る

勞君遠問龍城地 君を勞して遠く龍城の地を問わしめば

正北三千到錦州 正北三千 錦州に到る

(四二『柳州寄京中親故』)

「林邑」、「牂牁」は、『得盧衡州書因以詩寄』(四二)でも「林邑東に廻りて山戟に似たり、牂牁南に下りて水湯の如し」と言われている。「龍城」は柳州の郡名。「錦州」(今の湖南省麻陽縣)は、柳州から直線距離にして四百キロ弱。錦州から長安までは直線距離で七百數十キロ。三・四句は、御苦勞さまにも柳州においでいただくとするれば、

ま北へ三千里行つてようやく錦州というそんな所と、都からのはてしない隔たりを強調している。

この詩が靜かな情調をただよわせているのは、柳州が都からはてしなく隔てられた異域であることをうたつていながら、隔たりにあらがう表現を持たないからである。言うまでもなく、隔たりを表現することは望郷の情の現われであり、だから葛藤が消えたわけではない(以下この節で葛藤の語を用いる時は、特に斷わらない限り全て第一の葛藤を指す)。だが望郷の情そのものには表現は與えられていない。この詩が表現しているのは、はてしない隔たりに壓せられた靜かな悲しみに満ちた望郷の情である。

次の詩では、はてしない距離の表現と盡きることのない望郷の情とが渾然一體となっており、その情調はさびしく澄んでいる。柳州詩における望郷の表現を代表する作と言つてよい。

荒山秋日午 荒山 秋日午なり

獨上意悠悠 獨り上りて意悠悠

如何望郷處 如何なるや郷を望む處

西北是融州 西北は是れ融州

(四二『登柳州峨山』)

「融州」は柳州のま北よりやや西より。地圖で見れば直線距離で百キロばかりの所。長安はそれよりも遙か一千キロの彼方に在る。

故郷長安との遙かな隔たりを言うこと、それだけならば永州詩にも見ることが出来る。だが永州詩では、それは詩中の一部分を占めるだけである。しかも望郷の情がこれと拮抗・對立して、隔たりへの強い

反撥を生み、あるいは第二の葛藤を誘引している。柳州詩のように隔たりそのものが主題としてうたわれることは一度も無かった。

例えば、「萬里の贈を爲さんと欲すれば、杳杳として山水隔たる」(四三『早梅』五・六句)と、早梅を贈りたくても不可能な楚地と長安との隔たりを歎く時、それは「寒英坐るに銷落す、何を用ってか遠客を慰めん」(同上結びの二句)と、望郷の情をひきおこして隔たりを思い知らせた早咲きの梅をうらめしく思う表現へ續いている。

また、始めに擧げた永州詩『南中榮橘柚』の結びの二句「攀條何所歎、北望熊與湘」は、『登柳州峨山』の後半と酷似するように見えて、やはり違いを含んでいる。故郷を望んでみても、見えるのは熊山・湘山であり、融州である。無限の隔たりを表現して望郷の空しさをうたう點で兩者は一致しているように見える。が、しかし、『南中榮橘柚』の「攀條何所歎」という表現では、激しい望郷の情と、歎いてみても仕方が無いものをという望郷の情の抑制とが、一句中に對立している。だから、「北望熊與湘」という隔たりの表現には、隔たりを認めると同時にこれに反撥するうらめしい感情がたまたまよっている。

『登柳州峨山』の望郷の情は、『南中榮橘柚』のように激しいものではない。その情感は一・二句から靜かなさびしさをただよわせていて、「西北是融州」という表現に、隔たりへの反撥はない。彼はこの隔たりを靜かに確認している。

ただ、この詩の場合、望郷の情が、『柳州寄京中親故』のように、隔たりの表現に包攝されてしまっているのではない。この詩では隔たりの確認の仕方に注意する必要がある。三・四句は、長安の見えないことが登ってみて始めてわかったという言いかたになっているが、これは自らにとぼけている表現であろう。なぜ自らにとぼけるのか。私

は、故郷を望めるわけがないのに、それでも望まずにはおれない自分をいとおしむ感情が、この二句を生んでいるのだと思う。ここに望郷の情の抑制は無い。

距離の表現は、流謫の現實を思い知らせる表現である。流謫の現實と望郷の情との激しい葛藤を底流に持ちつつ、その苦惱を忘れ望郷の情を抑制しようとする永州詩は、隔たりそのものを主題としてうたうことはない。それが詩中に現われる時は、これに反撥し、あるいは目をそむける。

ところが柳州詩は、故郷との隔たりを主題としてうたってこれにあらがわれない。柳州詩の柳宗元は、無限の隔たりをさびしくみつめていく。

故郷長安との隔たりは、空間的な距離の表現によってのみ示されるのではない。次の詩において、長安は、二度と歸ることのない過ぎ去った時に隔てられている。

事業無成恥藝成 事業成る無くして藝の成ることを恥ぢず
南宮起草舊連名 南宮に草を起こして舊と名を連ぬ
勸君火急添功用 君に勸む 火急に功用を添えて
趁取當時二妙聲 當時二妙の聲を趁い取れ

(四二『疊後』)

これは劉禹錫と應酬しあった連作の最後の一首である。「藝」とは書道のこと。柳宗元は草書の達人としても名が高かった。「南宮」は尙書省のこと。三・四句は、君に勧めたね、もしもの時の役にも立つんだから、私に追いついて當代二妙の名聲をいただこうと、の意。こ

の詩はその頃のことを思い出として語りかけている。士としての事業を達成しようとして、親友劉禹錫と勵んでいた長安時代は、遠く懐かしい過去となった。

長安は無限の距離に隔てられ、とりもどすことのできない過去に隔てられている。故郷との隔たりを靜かに認めるこれらの作を、僅かに一歩進めれば次の詩となるだろう。

上苑年年占物華 上苑年年物華を占む

飄零今日在天涯 飄零して今日天涯に在り

祇應長作龍城守 祇應に長く龍城の守と作るべし

剩種庭前木榭花 剩あまえ庭前に種まう木榭もくせの花

(四二『種木榭花』)

「物華」は萬物の精華。「龍城」は既出。「木榭」は、榭即ち日本のかしわにあたるものではなく、おそらく椿科の常綠喬木木斛、別名を厚皮香と言う樹であろう。廣く實用に供されるが、夏の末に淡黄色の花を開き觀賞用の樹でもある。

この詩は、時間と空間のいづれにも隔てられた思いを示している。

「物華」は、直接には御苑の美しい草木を指すが、たぶん、多くの土のきらびやかな働き、新しい土の官界へのデビュー等の意を含んでいる。それはかつての自分の姿でもある。だが、自分は今さすらい落ちぶれて天のはてに在ると言う。この對比は長安への思慕を明瞭にしているが、彼はその思いを激しくすることがない。望郷の思いは、遙か離れた天のはてに在る零落の感情に包まれ沈みこむ。そして、三・四句では、歸還の現實性についてはっきりとあきらめの思いを表明し、

柳州の地方官として一生を終えねばならぬだろうとの覺悟を示す。この詩において、長安への思慕は有っても、自らとの關係は斷たれてゐる。それは、先に擧げてきた詩が長安との隔たりを語っていた心境に等しく、柳州で一生を終える覺悟を語っている點で一歩を進めている。

以上、私は、葛藤の微弱な詩四首を擧げて、それが故郷長安との隔たりを絶對と受けとめる思いに由來していることを述べた。以下、柳州詩に固有のこの思いを、簡單に斷絶の感情と呼ぼう。

斷絶の感情が、歸還を不可能と見る意識に基づいていであろうことは、詩によつてもほほ察することができた。今、柳州時代の文のうち、この問題に關係する唯一の資料によつて、彼の意識を更に探ってみよう。始めと終わりを少し略す。

……宗元聞けり、三塗の艱を行きて千仞の下に墜つる者の有り、仰ぎて道を望みて、號びて出ださんことを求む。之を過ぐる者の日に千百人、皆去つて顧みず。就たとい令哀れみて之を顧みる者も、木を攀じ首を俯して、深しん賸びん太息して、良久しくして去るに過ぎざるのみ、其れ卒に奈何すべきこと無し。然れども其の人猶望みて止まず。俄かにして烏獲が若き者の有り、長綆じやうの千尋なるを持ちて、徐に過ぐ。其の力爲すに足り、其の器施すに足れり、之に號べども顧みず、顧みるも力むること能わずと曰わば、則ち其の人必ず大壑に死せんことを知る。何となれば、是の時遇うべからずして幸いに遇えり、而も又己に逮たばず、然る後に命の窮まり、勢の極まることを知る、其れ卒に呼よばずして自ら斃れ、復た上を望まず。

宗元曩者齒少きときに心鋭なり、徑行高歩して、道の艱きことを

知らず大阨に陥り、窮蹙^{きゆうそく}殞^{げん}墜^{てい}して、廢てられて孤囚と爲る。日に號びて望める者の十四年、其の願みずして去ると願みて深墮する者と、俱に乏しからず。然れども猶首を仰ぎ吭^{こう}を伸べ、目を張って視て曰く、庶幾^{しよき}わくは其れ異俗の心、非常の力、路に當りて仁を垂る者の有らんやと。今閣下仁義正直を以て、入りて相位に居るに及び、宗元實に心を拊し自ら慶びて、以爲えらく其の望む所を獲んと、故に敢て其の辭を致して其の哀を聲らす。若し又捨てて願みずんば、則ち沉埋^{ちんまい}陪^{ばい}斃^{げい}して復た振うこと無からんことを知る、伏して惟んみれば心を動かせ。

宗元罪を得るの由、謗を致すの自、閣下の明を以て、其の之を知ること久し。繁言蔓辭せば、祗益々^{ただ}驢^ろすことを爲さん。伏して惟んみれば墜者の至窮を念いて、烏獲が餘力を錫い、千尋の綆を舒べて、千仞の巖に垂れ、其の遇すべからざるの遇を致して、卒に其の幸を成せ。……

(三四)『上門下李夷簡相公陳情書』

文中に「日に號びて望める者の十四年」とあり、流された永貞元年(八〇五)より數えれば、この陳情書は元和一三年(八一八)、彼の死の前年に書かれたものである。李夷簡は、元和一三年、召されて御史大夫となり、門下侍郎、同中書門下平章事を拜している(新唐書卷一三二)。永州時代、慰撫の書を寄せられて感謝の書を奉じたこともある人である(三五)『謝襄陽李夷簡尚書委曲撫問啓』。

この書に現われた意識で、都への歸還を必死に望んでいるのは、永州時代もそうであったものの、より卒直な發露である。また、「曩者齒少きときに心鋭なり、徑行高歩して、道の艱きことを知らず大阨に陥り」、「罪を得るの由、謗を致すの自、閣下の明を以て、其の之を知

ること久し」と言うように、失脚したのは自らに處世の知恵が缺けていたからであり、他者の誹謗を防げなかったからだとするのも、永州時代の意識と變らない。

ここで永州時代と違ふのは、彼が歸還の困難を熟知し、殆ど不可能と見ている點である。彼は十四年の長きにわたり必死に救いを求めてきたのだが、「願みずして去ると願みて深墮する者と」の兩者は勿論、力と器量を兼ね備えた「烏獲(秦の力士)が若き者」でさえも、遂に救つてはくれなかつた。「是の時遇うべからずして幸いに遇えり、而も又己に逮ばず」と言うのを見れば、この救われそうになつて救われなかつた體驗が、元和一〇年の北還から柳州への改貶の體驗を指すこととは明らかである。この體驗の後、彼は命運の極まつたことを知り、二度と歸還は望まなくなつたのだと言う。ここには柳州詩について私の指摘してきた斷絶の感情を確認することができる。そしてそれは、十年にわたる期待と失意の繰り返しの後の、北還から再度の流謫という大打撃が決定づけた感情なのである。

詩との關係について今少し觸れ、この節のまとめとしよう。

『陳情書』は、永州時代から柳州時代への柳宗元の意識で、根本的に變化したものは歸還の可能性に對する意識であることをはっきりと示している。今、この事實から、再び永州詩及び柳州詩の葛藤を見る時、一步踏みこんだ發言が可能である。それは同じく望郷の情と流謫の現實の對立する葛藤ではあるが、より嚴密に言えば兩者の構成要素は變化しているのである。

永州時代の詩文は、歸還の現實性への期待を持っているのに即應して、しばしば自己の正當性を主張し、望郷の情は歸還の願望と直結する傾向を持つ。

その詩での現われについては、前者は、『南中榮橘柚』、『冉溪』の二首に既に見た。一方は長安を思い、一方は永州に落ち着こうと言いい、方向は反対であるものの、自己の正當性を語る事が長安との心理的距離を近づけている點は同じであつた。

後者について少し付け加えておこう。『聞黃鸝』（四三）はその典型例である。要點を記す。鶯の聲に觸發されて、彼の心は故郷の園の情景で満たされ、鶯の鳴き飛びかう長安に歸っている。だが突然、「我今誤つて千萬山に落つ、身は儂人（楚人をいやしめて言う語）に同じくして還らんことを思はず」と言い、鶯よ早く都に歸れと懇願する。この過程全體が、そして歸りたいなぞと思わないと言ふことが、まさに彼の心が長安に生きており、望郷の情は即歸還の願望であることを示している。

だから、以上を簡単に、永州詩の葛藤の構成要素は、歸還の願望と歸還のかなわぬ現實だと言つてよいと思う。その葛藤が激しく、そこから逃避しようとする第二の葛藤を生むのは當然と言わねばならぬ。

柳州時代の詩文は、歸還を不可能と見る意識に即應して、普通、自己の正當性の主張も歸還の願望も現わさない。

『陳情書』では、李夷簡という一點の可能性が、めづらしく兩者をほとぼしらせているのである。

『登柳州城樓寄漳汀封連四州』、『與浩初上人同看山寄京華親故』二首の激しさは、『陳情書』の激しさに似る。しかし、この二首でさえも歸還の願望をほとぼしらせているとは言ひ難い。前者の「千里目」も、後者の千億の分身も、強い望郷の情の表現ではあつても、歸還の願望の表現にはなっていない。一方、この望郷の情の表現の對立要素

である無限の隔たりの表現は、『陳情書』の歸還を不可能と見る意識に符合し、この節に擧げた靜かな情調の作とも等しい。二首はやはり柳州詩としての特徴を備えているのである。

つまり、これは前節でも述べたように、柳州詩の葛藤は、望郷の情と無限の隔たりとを構成要素としている。少數の葛藤の激しい作を持つとしても、この構成要素では、次第に後者が優勢となつて、望郷の情の表現としての獨立性が奪われていくのは明らかである。そして、弱化する葛藤が別の葛藤を生むことは有り得ない。

歸還の現實性についての意識の相違に即應して、同じく望郷の情と流涕の現實が對立する第一の葛藤とは言え、永州詩と柳州詩とはその内容が質的に變化している。だからこそ、第二の葛藤も消失するのである。

ところで、斷絶の感情によつてもたらされ、逆に斷絶の感情を強めてもいると思われるまた別の問題がある。次節ではそれを考えよう。

三の三

別の問題とは死の意識である。先の『種木櫛花』でも、いつまでも柳州の地方官でなければならぬと言ふのは、柳州で身を終えること、即ち死の意識へと連なる表現であるが、しかし明言されていない。次の詩はそれをはっきりと語る。

瘴江南去入雲煙	瘴江南に去つて雲煙に入る
望盡黃茆是海邊	望み盡くせば黃茆是れ海邊
山腹雨晴添象跡	山腹雨晴れて象跡を添え
潭心日暖長蛟涎	潭心日暖かにして蛟涎を長ず
射工巧伺游人影	射工は巧みに游人の影を伺い

颺母偏驚旅客船 颺母は偏ひとえに旅客の船を驚かす

從此憂來非一事 此れより憂うれい來たること一事に非ず

豈容華髮待流年 豈いか華髮流年を待つことを容さんや

(四二)『嶺南江行』

詩は柳州に赴任する途中、柳江あたりで詠まれたものであろう。

「黃茆」は黄色のちがや。「象跡」は象の足跡。「潭心」は淵の中心。

「長蛟涎」は、みずちのよだれが長く吐かれています。「射工」は水中から砂を口に含んで人を射殺すという虫。「颺母」は暴風の前ぶれとなる一種の雲氣。

柳州詩中に山水詩を求めるとすればこの一首だけである。絶境の地の異様な光景を描寫し、結句では、白髮で流れゆく年月を迎えていける望みはない、ここでは生きてゆけないだろうと述べる。

次の詩句にも死への意識がうかがえる。

聖恩儻忽念行章 聖恩儻忽として行章を念う

十年踐踏久已勞 十年踐踏せられて久しく已に勞す

幸因解網入鳥獸 幸いに網を解きて鳥獸に入るに因り

畢命江海終遊逸 命を江海に畢えて終に遊逸せん

願言未果身益老 願言未だ果たさずして身益々老いたり

起望東北心滔滔 起ちて東北を望めば心滔滔

(四二)『寄韋珩』全三〇句の最後

「聖恩」は天子の恩愛。「儻忽」は他の用例を見ないが、おそらく、思いもよらずの意。「行章」は大雅生民之什に出る語で、道端の章。

「解網」は、湯王が網の三面を去って禽獸の逃げ場を作った故事（史記殷本紀）に基づき、やはり天子の恩愛により救われたことを言う。

「入鳥獸」は、莊子山木篇に「獸に入つて群を亂さず、鳥に入つて行を亂さず」とあるのに基づき、俗念を去つて自然界と一つになること。「江海」は海邊の柳州を指すが、これも莊子刻意篇に「江海の土、世を避くるの人……」とあるように、世俗を離れた地の意味をも持つ。

「遊逸」は氣ままに遊ぶこと。「願言」は前二句に述べた思い。「言」は語助。「東北」は韋珩の流されている處。「心滔滔」は水の流れるように思ひの盡きないさま。

これは赴任の道中の苦しさと同様な光景、赴任直後の賊の襲來からの脱出、身體の衰弱等を述べた後の詩句。十年の流謫生活の上に、柳州が想像を絶する邊地であること、彼は心身共に憔悴し、「畢命江海終遊逸」と言うように柳州での死を覺悟しているのである。

右二首は、彼が柳州到着の頃から死をみつめ始め、柳州での死を覺悟していたことを教えてくれる。

永州詩ではどうか。例えば始めて白髮を見た時、と言えばまだそれほど年ではないが、彼は老いを厭い、それを考えまいとしている

(四三)『始見白髮題所植海石榴樹』。また、齒はまばらで髪は薄く、走

ることもままならない衰えに直面しながら、人間なら誰でもそうなるものと一般論に解消させ、くよくよせず友人と美酒をくみかわそう

と言う(四三)『覺衰』。永州詩では、老いが問題となることはあつても、それを忘れ吹き飛ばそうとしている。死を覺悟する心境は柳州詩

にのみ見えるのである。

死を意識するのは無論衰弱が進んでいるからだ、それだけではない。身體は永州時代もかなり悪かった。更に例を付け加えれば、「一身

國を去ること六千里、萬死荒に投ず十二年」(四三『別舍弟宗一』、元和一年の作)の二句にも示されるように、それは斷絶の感情と一體のものとして、柳州詩に至って始めて現われるのである。

とはいえ、『嶺南江行』の「豈容華髮待流年」という表現は、長生を願った所でとても無理であろうという豫測される事態への思いであり、死を厭う感情を伴っている。『寄韋珩』でも、結びの二句には老いの速かさと自己の運命への歎きが見える。『別舍弟宗一』の二句にも同様のことは言えるのであって、これらの詩は柳州での死を覺悟しながらも、なお葛藤を含んでいる。

だが、次の詩はどうか。

手種黃甘二百株 手ずから黃甘を種う二百株

春來新葉徧城隅 春來 新葉 城隅に徧し

方同楚客憐皇樹 方に楚客の皇樹を憐むに同じし

不學荆門利木奴 學ばず荆門に木奴を利することを

幾歲開花聞噴雪 幾歲か花を開きて雪を噴くことを聞かん

何人摘實見垂珠 何人か實を摘みて珠を垂るを見ん

若教坐待成林日 若し坐ながら林と成る日を待たしめば

滋味還堪養老夫 滋味還つて老夫を養うに堪えん

(四二『柳州城西北隅種甘樹』)

「黃甘」は、「橘の屬にして味精やか」と言う(漢書卷五七司馬相如傳『上林賦』郭璞注)。第三句は九章橘頌に基づき、屈原が美しい橘を愛でたのと同じ氣持ち、の意。ここは『南中榮橘柚』のように自己の才徳を強調しているのではない。第四句は吳丹陽の太守李衡が治産の爲

に甘橘千株を種えた(吳書三孫休傳注引襄陽記)のをまねるのではない、の意。「木奴」はもと李衡の言葉で、直接の意味は木の奴隸、甘橘を指す。

まず語られていないことに目を向けよう。この詩は、これまでに見てきた長安との斷絶の感情を、その極點にまで進めたものである。斷絶の感情のゆきつく所は、長安を全く語らないことであり、柳州に落ち着こうとも言わないことである。この詩は長安へのこだわりから解き放たれている。これは第一の葛藤を消失した、第一の葛藤とは無縁の世界である。

柳宗元は、ただ自ら種えた黃甘の樹をみつめ、その生長を楽しみにしている。緑の葉が一面に輝くのを目にうかべ、白い花の噴きこぼれるのを想像し、實を摘む日を思いうかべる。何年したら花は開くのか。どんな人が實を摘んでくれるのか。いつのまにか、柳宗元は死後の美しい世界をみつめている。

この詩には、生長してゆく黃甘と死んでゆく自己という、生と死との鮮かな對比がある。この兩者の間に殆ど葛藤は無い。最後の二句も生きのびることに力點が有るのではない。もし生きていればそのうまさかわかるのにと、黃甘の美味を想像しているのである。この詩の柳宗元は柳州の人間になりきっている。そして遠くない自己の死をすなおに受け入れている。

ところで、死についての意識は、『陳情書』を除けば詩の世界のみ示される。柳宗元の詩作への姿勢を示す一例であろう。そのことに最後は觸れる。

他人の筆になるものでは、韓愈『柳州羅池廟碑』(韓昌黎全集卷三二)が、翌年の死を豫知していたことを記している。ただし、廟建立の因

縁話という性格を考えると、具體的な事實をそのまま信ずるわけには
 いかない。關連する部分だけを擧げておこう。

嘗て其の部將魏忠・謝寧・歐陽翼と酒を驛亭に飲む。謂いて曰
 く、「吾れ時に棄てられて、此に寄す。若等と好し。明年吾れ將に
 死せんとす。死して神と爲らん。後三年に廟を爲りて我を祀れ。」
 と。期に及びて死す。

『柳州城西北隅種甘樹』と同じように安らぎに満ちた作を、柳宗元
 はもう一首残している。それは、以上に述べてきた斷絶と死の問題と
 共に、また別の問題を提示している。

三の四

柳州柳刺史 柳州の柳刺史

種柳柳江邊 柳を種う 柳江の邊

談笑爲故事 談笑故事と爲る

推移成昔年 推移して昔年と成る

垂陰當覆地 陰を垂れて當に地を覆うべし

聳幹會參天 幹を聳えさせてかならず天に參らん

好作思人樹 好し人を思ふ樹と作るに

慚無惠化傳 慚ずらくは惠化の傳無きことを

(四二『種柳戲題』)

この詩もまた、先の詩と同じく長安との斷絶の感情のゆきつく所に
 生まれた、長安への思慕とは無縁の作である。そして、この詩でもま

た先の詩と同じように自己の死がうたわれている。三・四句は自己の
 死を語るのであり、これに對して五・六句は、自らの死後に大きくな
 ってゆく柳をうたう。やはりここには、自己の死と柳の生との對比が
 ある。そして、この柳の生の中に彼の生命は生き續けるのであり、死
 を厭いあらがう姿勢は無い。その情調は美しく安らいでいる。

以上二點は、先の詩と同様の特徵である。だがこの詩には、また別
 の問題が有る。七・八句を見よう。第七句「思人樹」の語は、左傳定
 公九年に、「詩に云う、蔽芾たる甘棠、翦勿かれ伐つ勿れ、召伯の
 棠りし所ぞ、其の人を思いて、猶其の樹を愛す。」と有るのに基づ
 く。召公は訴訟を聽いてまわるさい、人民を煩わせるのをきらい、甘
 棠の下に野宿して訴えを決裁した。村人はその徳をこうむり、教化を
 悦び、その人を慕って、木をも敬ったと言う(召南甘棠鄭箋に依る)。

つまり、柳宗元は、召公のようにゆかりの樹によっていつまでも民
 に慕われ思ひおこしてもらいたいのだが、それを望むほどの治績と教
 化の言い傳えの無いのが恥ずかしいと、最後はわが望みへの一種の照
 れ臭さを表現しているのである。柳によって永生を願う氣持ちは大ま
 じめであるが、それをそのままに表現することには恥ずかしさを覺
 え、だから「戲題」という態度をとったのである。「戲」は無論一・
 二句の語路合わせを含むけれども、單にそれだけではない。

つまり、この詩がこのようにも明るく穏やかな情調を持つものには、
 長安との斷絶の感情や死を受け入れる意識だけによるのではない別の
 要素が有り、この詩自らがそれを語っている。「談笑」の二字は、柳
 州の民との親密さを示している。また「漸無惠化傳」と言うが、その
 ように言うことが既に、刺史としての事業への一定の自負と柳州の民
 の敬慕とを前提としている。そうでなければ、「好作思人樹」と言う

ような望みを抱くべくもない。治績への自負、柳州の民の敬慕、また彼らへの親愛の情、總じて言つて刺史としての満足感を、『種柳戲題』の穩やかな情調の由來として、見逃すことはできない。

先の『柳州城西北隅種甘樹』の柳宗元は、「老夫」であつて刺史としての顔は殆ど出ていない。しかしながら、共に黄甘を種えた、そしてまた花の咲くのを知らせ實を摘んでくれるであらう、柳州の民への親愛の情は十分に現われている。

なお、擧例の紙幅は無いが、『柳州峒氓』(四二)は、柳州の民の異様な習俗と、刺史として彼らに近づこうとする思いとの葛藤の所産であり、結びの二句では「公庭に向かいて重譚を問うことを愁い、章甫(禮冠の名)を投じて文身と作らんと欲す」と、苛立つ思いを表明している。

『種柳戲題』、『柳州城西北隅種甘樹』の二首は、『柳州峒氓』に見える刺史としての葛藤の終着点でもある。

四

以上、私は、柳州詩は葛藤の弱さあるいは消失をその特徴とすることを示した。同時に、その原因を詩それ自體のうちに求めて、長安との斷絶の感情、死を受け入れる氣持ち、刺史としての満足感、の三つを指摘した。いくらかの葛藤の激しい作も、既に見たようにその弱化・消失への方向を示している。

三者はいずれもが、柳宗元を長安から遠ざけ柳州に近づけるものであるが、同時にまた互に關連しあつてゐる。

例えば『嶺南江行』では、絶境異域にやつてきた斷絶の感情が、死を自覺の俎上にのぼせていた。逆にまた『柳州城西北隅種甘樹』に見

るように、柳州での死を受け入れる氣持ちは長安を完全に視野の外に置いてゐる。

『種木斲花』では、斷絶の感情が柳州刺史として身を終えることをやむをえないものと受けとめる思いに向かわせていた。『柳州峒氓』は、その姿勢のより積極的な表現である。逆に『種柳戲題』では、刺史としての満足感が、長安との斷絶を受け入れて柳州に安らぎ、更に死を受け入れる素地となつてゐる。同じことは『柳州城西北隅種甘樹』についても言えるであらう。

こうして三者は互に關連しつつ、柳州で身を終えることを覺悟し、それに安らぐ方向へと柳宗元を向かわせ、柳州詩の靜かな情調を作り出している。

繰り返して述べてきたことだが、柳州に在つても彼は望郷の情を棄て去つたわけではない。北還時の不安と喜びを除いては、永州時代から柳州時代の全時期を通じて、程度の差は有れ、彼は望郷の情と流謫の現實が生み出す葛藤に苦しめられ續けた。この苦惱からどのようにして解放されるかということが、永州詩・柳州詩を問わず、柳宗元の詩を一貫する課題となつてゐるのである。

その永州詩における解決策は、山水美に没入し、莊子・佛教の思想に傾斜し、長安を俗塵の巷とみなすことであつた。これらの全てが、流謫の苦惱・煩悶から抜け出す爲の無理を伴う努力であつたことは、最早繰り返す必要が無い。彼は流謫の現實にあらがい、己の眞の望みに背を向けて、得ることができず得ても一時のものでしかない安寧を求め續けたのである。

柳州詩における解決の方向は、これとは反對に、流謫の現實に身をそわせていく道であり、己を欺く無理な解決策を持たないことであ

る。その斷絶の感情は、彼の體驗と境遇を忠實に反映するものであり、死を受け入れる氣持ちもまた境遇を見極め衰弱を知る所から生まれている。刺史としての満足感、與えられた境遇の中で彼本來の儒家としての精神を卒直に發揮した結果である。要するに、柳州詩を特徴づける三つの意識は、全て事實に基礎を置いて生まれているものである。柳州詩は、流謫の現實に身をそわせ、遂にはこれと和解した世界だと言える。

だから、無限の寂寞を悠然と受容する無心の世界たる『江雪』が、第二の葛藤を最もつきつめた作として、永州詩の頂點に位置するとすれば、『柳州城西北隅種甘樹』、『種柳戲題』の種樹詩二首は、柳州詩の志向する葛藤の弱化をつきつめて、遂に葛藤を消失し安らぎを實現した世界として、柳州詩を代表する作と言つてよい。

吐き出すことが一つの淨化作用であるという意味では、詩を作ることと自體が苦惱からの解放を求める營みである。だが、それとはまた別の意味で、柳宗元は、單に苦惱を吐き出すのではなく、安寧を得る爲の心の持ち方を、詩を主要な場として追求し續けた。詩人としての柳宗元は、十餘年の歲月をかけて、その宿題を果たしたのである。

注(1) 本稿の目的に必要な範圍に限り、柳宗元の略歴を記しておく。

柳宗元が、王叔文の失脚によりその一黨として罪を得るのは、憲宗即位の永貞元年(八〇五)、宗元三三歳の時である。始め邵州(今の湖南省邵陽市)刺史を命ぜられるが、赴任の途中、十一月、更に罰を重くして永州司馬に改められる。翌年、改元されて元和元年となり、元和一〇年(八一五)正月、四三歳の時、憲宗の詔書を得て長安に赴くまで、まる九年の間永州に暮らした。長安には二月に着くが、三月直ちに柳州刺

史に改貶される。到着は六月。四年餘の後、元和一四年(八一九)晩秋、四七歳で柳州に卒する。

(2) 例えは長く柳州での作として扱われてきた『童區寄傳』(二七)も、永州時代の作である。笈文生「柳宗元「童區寄傳」考」(立命館文學第三三八・三三九合併號、一九七三)を参照。

(3) 吳文治「柳宗元評傳」(中華書局、一九六二)、以下「評傳」と略す、笈文生「韓愈、柳宗元」(筑摩書房中國詩文選、一九七三)は、柳州時代の柳宗元についても論述する数少ない例である。章士釗「柳文指要」(中華書局、一九七二)は、無論全時期の文に觸れる。その他、柳州時代の詩に對する譯注の類は幾らか出ている。これらは以下必要に應じて注記する。

(4) 「柳宗元の『漁翁』、『江雪』二首について」(中國文藝研究會編野草第二三號、一九七九)、「柳宗元永州望郷詩」(同二七號、一九八一)。以下、簡便の爲、前者を第一論文、後者を第二論文と呼ぶ。

(5) テキストは百家注本「柳宗元集」(中華書局、一九七九)を用いる。同書「校點後記」及び吳文治「《柳宗元集》版本源流考略」(中國人民大學出版社文學論集第二輯、一九七九)に依れば、百家注本は、現存する宋刻本の中では最も時代が早く又よく整った版本である。ただし、「校點後記」、吳文治論文共に、五百家注本の完本(鮑良甫本)が日本に存することに氣づいていないのは、校勘作業として重要な失點であろう。

なお、訓讀にあたっては、鵜飼石齋及び林羅山の訓點(前者は汲古書院和刻本集成、後者は内閣文庫藏「新刊五百家註音辯唐柳先生文集」林羅山手澤本を景照したもの)を参照した。

(6) 『答韋中立論師道書』(三四)は、元和二年(八〇七)、永州に大雪の有ったことを記す。第六句に「飛雪滯故郷」と言うから、それ以前の作である可能性が高い。

なお、『江雪』(四三)の制作年を考證するのにこの書を挙げたものと

して、陳正祥「詩的地理」(商務印書館香港分館、一九七八)を、第一論文注⑨に記したが、それよりも早い論評として、高樹裕・翟大炳「評柳宗元的《江雪》」(光明日報、一九七五、一一、二二)が有る。筆者の遺漏を補っておく。

(7) 「晉問」(二五)に「吳子問於柳先生曰、先生晉人也。」と有るのは、祖先が代々河東に住んだことをもってこう言うに過ぎない。出生地については二つの説が有る。全祖望「鮎埼亭集」外篇卷四〇河東柳氏遷吳放は吳説。斎藤拙堂「續文話」卷四柳柳州年譜、施子愉「柳宗元年譜」(湖北人民出版社、一九五八)、吳文治「柳宗元簡論」(中華書局、一九七九。以下「簡論」と略す)の三者は長安説。長安の可能性が高いが、今暫く保留し、後考を待つ。ただし、それは本稿では問題ではない。注⑨に述べるように、彼は長安を故郷とみなしていた。

(8) 「簡論」一〇三頁には、詩歌の總數一六三首(新出の一首を含む)、永州での作一〇三首、柳州での作四〇首、北還時の作九首、柳州への赴任の途次の作八首、長安時代の作二首、確定できない作一首と明記する。しかし、例えば『種仙靈賦』(四三)、『種白蘂荷』(四三)を、「簡論」は柳州時代の作とするが(二七頁)、前者は「近在湘西原」の一句が有って明らかに永州での作。後者も永州での作のように思われるが(施子愉は永州での作とする)、斷言はできない。他にも確定の困難な詩は有り、今しばらく概數を記すに留める。

なお、詩歌は卷一雅詩歌曲と卷四二・四三古今詩に收められているが、卷一の作は「唐の光明を佐け」(獻平淮夷雅表一首)「國事に益有らん」(唐鏡歌鼓吹曲十二篇序)とする、公的性格の強いものである(制作の動機はまた別の問題である)。一方、卷四二・四三の作は、その殆どが何らかの意味で柳宗元個人の流謫の苦惱を反映する。

本稿はその課題の性質上、卷四二・四三兩卷の作を主な對象としている。そこで、卷一の詩數を引いた永州詩・柳州詩の概數を記しておく。

柳宗元柳州詩

と、前者はほぼ九〇首、後者は四〇首弱となる。

(9) それを典型的に示すのは「梅雨」(四三)である。第二論文第二章に言及した。

(10) 第一論文に詳述した。

(11) 「溪居」はおそらく元和五年愚溪を得て後の作。「構法華寺西亭」は元和四年晩秋の作。二首を年代順に見れば亂れた心境から安定した心境へ移行したことになるが、永州詩の全體がそのような方向の變化を示すのではない。

(12) 私が激しい葛藤を示すと見ている作は、以上の三首に、「別舍弟宗一」、「柳州峒氓」(この葛藤の性質については後述)の二首を付け加えた五首に盡きる。

(13) 「郷」を彼の原籍である山西省河東(今の永濟縣)と見る説が有る。蔣之翘本の注に始まり、陳友琴「關於柳宗元的詩及其評價問題」(光明日報、一九六一、九、一七)はこれを襲う。日本では、前野直彬「唐詩選」(岩波文庫、一九六三)も河東説をとる。しかし、柳宗元の詩で、「郷」が河東と確認できる例は無い。逆に、「散上峯頭望故郷」(前掲)、「憑寄還郷夢、盤蹙入故園」(四三)、「零陵早春」(四三)、「郷禽何事亦來此、令我生心憶桑梓」(四三)、「聞黃鸝」等の例は、明らかに長安を指す。

また、柳州から見れば兩者は共にほぼ東北に位置するとは言え、長安は河東の西南約一六〇キロの所に在る。「郷」の方角を「西北」と意識するのに、河東よりもよく符合するであろう。

(14) 「遠客」を遠方の朋友とする説がある(人民文學出版社「柳宗元詩文選」、一九七六)。しかし、「忽如遠行客」(文選卷二九古詩十九首其三)、「去鄉離家兮來遠客」(同卷三三九辯)等の例によって明らかないように、「遠客」とは故郷を離れて遙かに旅する人(あるいはその状態)である。

また、「萬里の贈を爲さんと欲する」望みは「杳杳として山水隔たる」

で断ちきられてしまつてゐる。結句でなおその人を「慰」める手立てが無いと歎くのは無用の繰り返しである。「遠客」は柳宗元自身を指すと考へるのが良いだろう。

(14) これと對の作である『疊前』には、娘しかいない歎きを洩らしている。従つて、制作時期は、着任して暫くの時を経て以降、元和一年に長子が出生する（韓愈『柳子厚墓誌銘』によつて知れる）以前ということになる。

なお、施子愉は元和一〇年の作と定めるが、生まれた月がわからないのだから、元和一年の可能性もある。氏の編年にしばしば行き過ぎた断定が有ることの一例である。

(15) 「柳文指要」は、讀者を感動させない、切迫した調子は讀書人の本色を失する等五つの理由を擧げて、この書が偽作もしくは李絳宛てのものではないかとの疑いを述べている。

上書の相手に李絳の可能性を考へるのは、舅の楊愬を彈劾した仇敵に、このような書を出すのはおかしいと考へるからである。しかし、「絳」と「夷簡」とは全く違う名で、刻本となるまでのどの段階でもまず誤りようがない。また李絳は確かに同中書門下平章事を拜しているが、それは元和六年のこと、その後官位は移動し元和一三年には兵部尚書である。李絳に上書した可能性は問題とならないだろう。

要するに、上書の相手に別人を考へるのも、書の内容が柳宗元らしくないと見る所から出ている。その理由の一つ一つについて検討することは相當の紙数を要するのでここでは差し控へるが、決定的な根拠が擧げられてゐるわけではない。私は、この書は柳州時代の柳宗元の心境への理解を深める重要な資料であり、その眞實性に何ら問題は無いと考へてゐる。そのことは本文に述べる通りである。

(16) 失脚の原因に關する柳宗元の意識については、これまでの研究で既に疑問の餘地が無い。この點に觸れた主な論文及び著作としては、清水茂

「柳宗元の生活體驗とその山水記」(中國文學報第二册、一九五五)、「評傳」、太田次男「柳宗元の山水記について」(斯道文庫論集第三輯、一九六四)がある。

柳州時代の詩文は、この書を除けば失脚の原因には觸れない。ただし、柳州への途次、「直ちに博疏を以て物議を招く、文字を繕(と)めて時名を占むることを休めん」(四二『衡陽與夢得分路贈別』)、「書を信じて自ら誤ることを成す、事を経て漸く非を知る」(四二『三贈劉員外』)、「險を以て自ら防がず、遂に明の誤る所と爲る」(四二『商山臨路有孤松往來研以爲明好事者憐之編竹成援遂其生植感而賦詩』)と言つて、都での出來事と再度の放逐の原因に觸れる。これを見れば自らの非への自覺が強まつてゐるようだが、それはあくまで處世の術の範圍内のことである。

(17) 永州時代の期待と失意の最たるものは、數度の恩赦への期待と、その對象から洩れ續けたことである。この點については前掲太田論文第四章冒頭を参照されたい。

歸還時のおおよその事情については、資治通鑑元和一〇年の項に、「王叔文之黨坐謫官者、凡十年不量移。執政有憐其才欲漸進者、悉召至京師。諫官爭言其不可、上與武元衡亦惡之、三月、乙酉、皆以爲遠州刺史、官雖進而地益遠。」と有つてよく引かれる。これに據れば、柳宗元らの都への復歸を實現するだけの力がまだ長安には熟していなかったことが知れる。

(18) ただし、「嶺樹重遮千里目」の一句は、宋代に存した一本では、「雲歎く去くこと千里の馬の如し」となつていたらしい。だとすれば、千里の彼方へも自在に飛びかけていく雲とは正反對に、歸還のこなわれない吾が身を悲しむ句と解釋するのが自然である。その場合は、少なくとも歸還を問題としてゐることになり、『陳情書』の内容に一層接近する。

(19) 『登柳州城樓寄漳汀封連四州』第五句の原形が注(19)に述べた「雲歎去如千里馬」であつたとしても、これと同様の心境を反映すると思われ

句は、他には、「情を擬らして江月落ち、思を屬して嶺雲飛ぶ」(四二)『奉和周二十二丈酬郴州侍郎衡江夜泊得韶州書并附當州生黃茶一封率然成篇代意之作』が有るに過ぎない。

歸還の願望は望郷の情の自然な現われであり、彼は歸還の願望を無くしてしまつたわけではない。しかし、それは通常歸還を不可能と見る意識に服従して、表現の場をみせることも滅多に無いのである。

(2) 『答劉連州邦字』(四二)に「崩雲滴水を下り、劈箭溇江を上る」と有るのに據れば、彼は湘江から靈渠を経て漓江を下り、桂江に入つて、更に溇江、黔江、柳江と溯つて柳州に赴任したことが知れる。第一句に「瘴江南去」と言うから、おそらく柳江を溯る船上で詠んだのであろう(以上、廣西人民出版社「柳宗元詩文選讀」一九七五を参照)。

(2) 廣西人民出版社前掲書は「蛟、这里可能是指穿山甲。」と注するが採らない。

(2) それも赴任の途次の作であり、自ら山水に出遊して詠んだ作は一首も無い。永州詩を代表する山水詩が、柳州詩では消失するのである。このことは、作品の散逸の可能性や刺史としての多忙を考慮に入れたとしても、なお兩時期の詩の特徴を考える上での重要な問題だと思える。同様に、永州詩の『巽公院五詠』(四三)のような佛教詩が柳州詩には無いことにも注意すべきである。この問題については稿を改めたい。

(2) 一七句から二〇句に「今年毒を噬みて霍疾を得たり、心を支え腹を攪く較と刀と。邇來氣少くして筋骨露る、蒼白滌汗として顛毛に盈つ。」とある。「霍疾」は霍亂、急性腸カタルの類。二〇句は、白毛が水の流れるように頭髮に満ちることを言う。

(2) 『寄韋珩』以外では、『浩初上人見貽絕句欲登仙人山因以酬之』(四二)に、「病來方外事多く違う」と言つて、登山の誘いを断る理由の一つとして、散文では『柳州東亭記』(二九)に、身體をいたわる心境を窺うことができる。

(2) 例えば、元和四年宗元三七歳の作『與李翰林建書』(三〇)には、健康が損われてしまつて、歩けば膝が寒氣でがたがた顛え、坐れば髀(太股)が痺れる、と書いている。

(2) 永州詩でも「沈埋死地に全く、流落生涯半なり」(四二)『同劉二十八院長述舊言懷感時書事奉寄澧州張員外使君五十二韻之作因其韻增至八通贈二君子』と言う。しかし、彼はまだ生涯の半ばと意識しているのである。

(2) 『陳情書』にも、「烏獲が若き者」が「力むること能わずと曰わば、則ち其の人必ず大壑に死せんことを知る。」とあった。

(2) 永州時代の司馬という閑職ではなく、刺史となつた彼は、奴隸の解放を始めとして各種の事業を活潑に推し進めている。その結果として、羅池廟建立に象徴されるように、民の深い敬慕も得た。これらのことについては、「評傳」、寛文生前掲書に詳しい。

(2) 柳州詩の静かな情調の背後には、元和一年、待望の長男が出生して、多年の「無後」の悲哀から解放されたということも有るのかも知れない。しかし、そのことは詩には觸れられていないから(娘しかない歎きはうたわれている。注(9)に既述)、柳州詩の情調の由来の一つとして、これを敷えることはしなかつた。

(3) 第一論文に詳述。

(2) 例えば、第一論文で、私は、詩のみに用いられている「機心」・「機事」の語の用法に着目して、永州時代の詩と文との差違に言及した。それは、散文では饒舌に述べている失脚の煩悶を、この概念的な語に閉じて否定しているのであり、永州詩が表現するのは、「機心」を去つて「無心」を得ようとする葛藤だということであった。永州時代の詩文はしばしば失脚の煩悶を語るのだが、詩のそれは文の赤裸々な表現には到底及ばない。

柳州時代の詩と文との間に、そのように指標となる語は無いと思われ。だが、歸還の願望を噴出させたのは、一篇とは言え文であり、柳州での死を受け入れる安らいだ情調は、詩のみに見ることができた。